

ニワトリの獣医師と呼ばれて6

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

オランダで発生した鳥インフルエンザが養鶏場を巡回していた獣医師に感染し、死亡に至るといふショッキングな情報に接し、筆者が学生時代に行ったインフルエンザ研究(卒業研究)がフラッシュバックしたため、前二回に渡ってストーリーを先回りさせてA-1について述べた。

本連載は自伝的な読み物を意識しているが、今回の経験を踏まえて年数度、鶏病に関する時事問題を取り上げ、私見を前提とした分析を試みることも興味をもってお読みいただけるように感じられる。今回からしばらく本線に回帰し、冬に差し掛かる頃に、改めてインフルエンザに関するトピックスを異なった切り口で取り上げたい。

ニワトリの獣医師のタマゴが産まれた!

最近、筆者に三番目の息子が誕生した。彼が母親から産まれた瞬間は、『目の前が急に明るくなった』といった感じなのだろうか? これは、ニワトリのタマゴも同じなのだろうか? タマゴは、メンドリの体内で卵巣から放たれ、輸卵管を通じて、産卵されたその瞬間に明るさを感じるのだろうか!?

当時の筆者の気持ちは、先に述べた、『生み出されたタマゴの気持ち』をイメージしていただくとわかりやすいのかもしれない。いよいよ、憧れの地である岐阜に移り住むのであるが、心配なことがあった。

『金』

大学受験失敗のあと、養鶏場でアルバイトをしながら勉強した真っ暗な一年間を経て、筆者はやっと獣医師のタマゴとなることができた。タマゴとして産まれた途端に、筆者の目の前が急に明るくなったような気がした。まさに、前途揚々という言葉がぴったりの感じ……。

入学手続きや引越しに必要な『お金』のことである。父の筆者に課した厳しい条件は、大学受験を一回で通過することであり、筆者は一度見事に玉砕した。その後の道が閉ざされてしまったのだ。

筆者の家庭の常識では、当然その後は養鶏場に勤務して、父の仕事を助ける(つまり、苦痛だったワクチン作業が一生の仕事になる)ことに

なる。しかし、非常に幸運なことに、ドクターKをはじめ、養鶏場の社長熱心な説得により、ニワトリの獣医師になる道が残されたといういきさつは前に述べた。

それ以降、筆者は親元を離れたのだった。

ニワトリの獣医師になる道が残されても、筆者にお金はない。一年間続けたアルバイトで稼いだ費用は、当然のように生活費に消え、入学金や授業料に全く足りるわけもない。

せっかく合格したのに、一難去つてまた一難。筆者は途方に暮れるしかなかった。

しかし、捨てる神あれば何とやら、ある日、件の社長が大変有り難い申し出をして下さった。

「一敏君、君の大学入学の費用と生活が軌道に乗るまでの費用は、俺が払ってやろう」

「本当ですか!! ありがとうございます!」

「俺は、人生に目的がある奴は助ける主義なのだ」

「本当にありがとうございます!」

と筆者には他の言葉が出ない。「このお金は、この業界に戻ってくるのだったら、返さなくてもいい」

い」と社長は言つて下さった。

こうして、筆者のニワトリの獣医師になる道が大きく広がることになった。この時、差し伸べられた社長の手がなければ、現在の筆者はなかっただろう。幸運に幸運を重ね、めでたく筆者はニワトリの獣医師のタマゴになることができたのだ。

後にドクターKがそれとなく社長から聞いて教えて下さったところでは、支払つて下さった総額は、三〇〇万円にもなるものだったらしい。筆者が約束通りニワトリの獣医師になったからか、社長は卒業後一度もそのお金を催促されなかった。

「いくら約束を守つてニワトリの獣医師になつたとはいえ、お金を貰いきりでは、男がすたるぞ！」

これは、ドクターKが筆者が俳優ピーキューシーに就職した時にアドバイスして下さった言葉である。陰に日向に、いつも応援して下さい

たドクターKの言葉を胸に、筆者は五年間かけて貯めた貯金をはたいて、その金を返すことができた。その折に社長の顔に浮かんだ笑顔がよく言う『破顔』というものだろうか、その顔から「一人前の男として認め

たよ！」という無言の言葉が聞こえてきたものだ。

筆者が社会に出てから十年が過ぎようとしている。その今、当時世話になつた社長の姿を振り返り、改めて「人(器)の大きさ」というものを感じる。もちろん、「筆者にとつての恩人であるという条件を差し引いて」である。

近頃、筆者は「人(器)の大きさ」とは何であろうと、よく考えさせられる。現在の筆者にとつての答えの一つは、『夢(目標)の大きさ』と言えるであろう。

この連載でも触れたが、社長の大きな『夢』の一つとして「農場で育つた子供たちが魅力を持って働きたくなるような農場にする」ということが挙げられる。筆者にかけて下さつた「業界に戻つてきたら、お金は

返さなくてよい」という言葉も、その『夢』の延長だろう。

また、筆者がピーキューシーに入社して以来、言われ続けていることは、「わが社の社員としてでなく、業界のスタッフとして育て」ということである。

現在の筆者が『夢』に「自分だけの欲に捕らわれない目標を持つ」という共通点を見出すことができる。社会には綺麗ごとでは済まないことが必要悪として存在する。自分の欲というのも大事だ。

しかし、ドクターKや社長が身をもって教えて下さつたように、「基本となる精神は、己の物欲に捕らわれない。社会に対するでかい夢に魅力を感じ、それに一步一步近づいていくように努力すること」と感じる今日この頃である。

凄じぜ！ 採卵養鶏業界

とにもかくにも、筆者は大学の入学手続きをするために、岐阜に行くことになった。手続きには、親代わりになつて下さつていた社長と養鶏場のスタッフが行って下さつた。

『何故、そのスタッフも一緒に行

入学手続きを早々に済ませた筆者も行動を共にした。最初に見学した所は鶏舎やケージを作る工場だった。筆者の働いた養鶏場のウインドレス鶏舎も大きい。この工場はもつとでかい。鶏小屋工場というイメージは全くない。鉄工所そのものだ。強烈な製作現場の光景に筆者は大きなカルチャーショックを受けて立ち竦んだ。

「青空鶏舎の時代とは、雲泥の差ですね」

「当たり前だろ！」と社長。

「鉄工所みたいですね」

「養鶏場を経営するためには、ニワトリだけでなく、こうしたこともわからないと経営していけないんだよ！」とは社長の言。

当時、筆者は社長の言葉を何となく理解したつもりになっていたが、社会に出てからお会いした様々な養鶏経営者の方の話を伺うたびに、その広範囲で深い知識量の凄さを実感する。

「豊富な知識を持つ経営者の方々について行き、そのうちにはある部分で、そうした方々の一歩でも半歩でも先を歩けるように……」というのが最近の筆者の願いである。

次に、筆者らは静岡県まで移動し、一見普通のウインドレス鶏舎のある養鶏場を見学した。

当初、何故この養鶏場を見学しに来たのかわからなかったが、鶏舎内に入るとすぐ合点がいった。鶏舎内にはいろいろ形式のケージシステムが組み込まれていて、比較試験のために同一条件になるように同ロットの鶏群が同時に飼育されている。すなわち、ケージシステムによるメリット・デメリットの対比分析が目的である。

この施設では通路からケージと鶏の飼育状態が一目で観察できるように、壁の一面がガラス張りになっていたことが印象深い。

「このケージの特徴は…」と説明する施設責任者に対して、社長の質問が飛ぶ。

「ケージ当たり何羽収容できるのかネ?」

「あちらのタイプが五羽で、こちらが六羽です」

「換気はどうなっている…?」

「鶏舎上部から入気して、脇側に排気します」

このような類の問答が社長やスタッフの方と施設責任者の方となされ

ている間、筆者はそれらの対応の専門性や質問する社長の鋭い感性に感心するばかりであった。このような実践的な比較実験農場は、非常に興味深かった。もちろん、その時の筆者には質問ができるべくもなかったが。

後に研究とは、机上のものだけで

上の穴、下の穴?

筆者の大学(岐阜大学)は、元来養鶏業が盛んな地域に位置したため、日本で唯一の家禽畜産学があった。一般的には、畜産学は牛や豚を中心として学ぶ。しかし、この家禽畜産学では特にニワトリを中心とした研究が行われていた。

養鶏業界に従事していると、この学科の卒業生に出会う機会がある。

しかし、残念なことに、筆者が入学した年から学科が再編され、家禽畜産学がなくなってしまう。諸般の事情を考えて、やむを得ないとは思うものの慚愧(ざんき)に耐えない感もする。

大学二年生の夏頃のこと、『家禽畜産実習』という実習があった。その大学の大学に家禽畜産学があった名残

なく、実践的なものが非常に大切であるということ、ここピーピーキユーシーで教わった。実践的な研究が形になっているのを目の当たりにして、獣医師のタマゴながらに「この業界は、密かに凄(すご)いぜ!」と思、筆者は何だかワクワクしたものである。

であろうか?! この実習は、獣医師のタマゴたちにごく一部でも採卵養鶏の作業を経験させようというものである。筆者たちは、大学の敷地内にある実習農場に連れて行かれた。その場所には、ミニチュアサイズのウインドレス鶏舎があった。

「何だよ。この建物の中に鶏が飼育されているのかい?」と友人A。

「嘘だろ! 白田。本当にこんなところで飼育するのか?」と友人B。

「そうだよ」と筆者は短く答えた。実習の担当教官も含めて、鶏舎内に入ってみると、

「うわあ。暗いなア!!」

「あのカゴの中を見てみろよ!!」友人たちの罪のない会話に「ケージをカゴとは、これだから素人は…」

なんぞと、内心得意なような、冒されたくない領域に土足で踏み込まれたような、なんともいえない複雑な気持ちになったのである。

「あんな狭いところに、何羽のニワトリが入っているのだ?」

「まるで、マンションだな」

こういった全く一般人のリアクションと変わらない会話が獣医師のタマゴたちの間でなされていた。筆者は、ひとり経験済みなので、なんとなく自分は違う、といった気持ちを表現しなかったのだろうか、集団の後ろに腕組みをして皆の様子を興味深く観察していた。

「それでは、鶏を捕まえてワクチンを注射してみましよう」

実習担当教官が一羽の鶏を捕まえてワクチンを打って見せた。

「下手くそだな」

内心思いながら、相変わらず腕組みをして突っ立つ筆者。

次いで友人たちが実際に作業をする。この時、学生たちは筆者の全く予想もつかない行動をとった。彼らは、ケージからニワトリを一羽ずつ両手でそっと抱きかかえ、もう一人が注射を打つ役に回っている。今になってみれば彼らの行動はム

りもない。獣医学科の学生といつても、普通の生活をしてきた彼らにとつては、ニワトリは産業動物というよりペットの延長であろう。しかし、当時の筆者は、黙って彼らの行動を見ていられず、ワクチン打ちの見本を見せることにした。

「ちよつと、どいていろや。そんなやり方じゃ、日が暮れる！」

筆者は少し気負ってワクチン作業をやり始めた。腰にワクチンポトルをぶら下げ、右手に注射器。いつものその格好で、筆者は左手で、瞬間に五羽の足を掴み、すばやく太ももに注射してみた。

あまりのスピードに、彼らは驚いて声も出ない。

「どうだー」と内心、筆者は得意になったのは言うまでもない。なんせ小学生の頃から、イヤというほどヤラされてきたのである。これくらいは、朝飯前だぜといったところか。実習が終わって教室に戻ると、皆はいろんな感想や疑問を筆者にぶつけ始めた。

「鶏舎の大きさは？ 羽数は？」

「糞はどうやって処理するの？」

「一羽ずつ、すべてに注射するか？」

「手さばきが凄いな」

「鶏を生き物じゃなくて、モノとして扱っていたね」

獣医師のタマゴたちは、大多数が養鶏業界に進まないと決めているのに、知識に対しては貪欲であった。

そのため、筆者は、獣医師のタマゴたちから矢継ぎ早に質問されたのだ。しかし、何事によらず、注目されるというのはこれほど気持ちのよいものか、地獄の作業がこうした機会に筆者を自己満足させてくれるとは、フェーズが変わると価値の判断基準が変わることも面白い。

最後に、女学生がした質問が傑作だった。

「白田君。ところでニワトリのタマゴって何処の穴から出てくるのかしら？」

「ハッ？」

女性から聞かれるとは予想もしない質問に筆者は驚いた。

「上の穴かしらね。それとも下の穴かしらね？」と彼女は続ける。

何のことを言っているのか？ その場にいる級友たちは、理解できない。その様子を見て、さらに続ける。

「ほら、牛や犬はお尻の穴が上で、子供が生まれる穴は下でしょ。私の

場合は、四つん這いになれば、同じように……」

「……」

一同。

「いやだあ。私。恥ずかしい」

「笑」

いつの間にか、話題が下ネタになっていることに女学生はやっとな気がついた。獣医学科では、真面目に下ネタ話になることはよくあるが、今回は少々表現が露骨過ぎたかも……。

「鳥類では総排泄口といって、生殖の穴と排泄の穴は同じで、人間で言えば肛門からタマゴが産卵されるのだよ」

筆者は笑って返答した。

筆者にとつては、苦い思い出しかなかったワクチン作業も、実習ではチョコレートのピタースウィートを味わわせてくれるものであった。そして、知識に対して貪欲な仲間たちの姿勢を通して学問とは異なった何かを学ばせてくれた、たった一回だけの実習が青春の一ページになっている。

(筆者・(株)ピーピーキューシー 品質管理&生産管理部門長／獣医学博士／獣医師)